白鬚神社所蔵『白鬚神社縁起』註釈（一）

日高千晶

はじめに

先祖代々、地主であった私の祖母の家に伝わる猿田彦の掛軸がある。鼻長で素朴な風貌は、天狗のようであり、その名の通りサルのようでもあり、とても不思議である。

猿田彦とは一体どのような神であろうかと深く興味を抱いた。

サルと猿田彦の関係性はまだ明確ではないが、その謎を探るべく、『広文庫』『古事類苑』等からの関連記事や『神道大系』神社編二十三所収の『白鬚神社縁起』を通読した。

『白鬚神社縁起』は、翻訳が白鬚神社のホームページ上でも公開されているものの、これまで注解されていない。神世から戦国時代に至るまでの長い時代にわたる物語は、説話的奇趣に溢れ、読み物としても優れている。加えて処々に神仏習合思想が反映していて、宗教学的にも深い関心を集めるべきものである。これを一つの説話文学と見て、その文学史的意義を明らかにし、更に宗教学・民俗学研究の分野にも裨益する要素を探るため、詳しい注解が求められよう。

そこで、白鬚神社が公開している翻刻をテキストにし、語注を加えていく事にした。

ただし、拙稿における本文は、読み易さの便を図って、適宜、濁点・句読点・送り仮名・ルビを補ったり、漢字を平仮名に変えたりした事をお断りしておく。

なお、注解の対象となる資料名は、『神道大系』では「白鬚神社縁起」、白鬚神社のホームページでは「白鬚大明神縁起絵巻」「白鬚社縁起」とある。本稿では「白鬚神社縁起」に従った。

なお、拙稿における成果は未だ不十分な事を重々承知している。諸方面からのご批正を説にお願い致したい。

（序）

白鬚神社縁起

當社明神縁起清書之事、社僧福壽院諸家に願ふこと有りと雖も整はず。予明神に於いて匈匈[1]良久し。故に之を諸家に強ひて清書の事畢んぬ。[2]末世に筆者有るの疑ひを恐る。茲に依り別に一巻を副へ筆蹟名を表はす。且つ予の清書、之を辭すること固しと雖も、再往の懇望に依り禿毫を染め畢んぬ。

權中納言藤原朝臣

（花押）

寳永二乙酉暦陽[3]中下旬

（原漢文）

當社明神縁起清書之事、社僧福壽院雖レ有二諸家願一不レ整、予於二明神一匈匈良久矣、故強二之諸家一而清書事畢、恐下末世有二筆者之疑上、依レ茲別副二一巻一表二筆蹟名一、且予之清書、雖レ固二辭之一、依二再往懇望一染二禿毫一畢、

注

1　身を屈めて畏まるさま。ここでは崇拝信敬することを云う。

2　『神道大系』の訓読に従うと「末世に筆者有るの疑ひを恐る」であるが、「末世に筆者の疑ひ有らんを恐れ」または「恐らくは末世に筆者の疑ひ有らんと」の読み方が正しいと思われる。

3　陰暦二月。

（詞書第一段）

夫衆生の根機[1]まち〳〵なるゆへに、西天の大聖人、應縁又さま〳〵にして、或は三乗[3]と現じ、又は八部[4]と化し、十方世界、所として化度[5]の至らざる事はあらねど、わきて我日本の國には、千早振神の御かたちをあれます事、他の國にかつてきかぬ、不可思議廣太の利益也。こゝに近江國志賀郡、白鬚明神と申は、往昔、天照大神の勅をうけて、皇孫天津彦々火瓊々杵尊、天降ましますの時、先驅の神立歸り。一の神、天のやちまたにおれり。其鼻長七咫、背丈七尋、亦口もかくれ所も赤くてれり。眼は八咫の鏡をかけたらんやうにてりかゝやく事、赤かゞちに似たり、と申しぬ。八十萬神達も、目勝て尋とふ事あたはざりしを、天鈿女尊[8]におほせてとはしめ給ふにぞ、はじめて猿田彦大神と名のり、尊の天降ましますをむかへ奉りぬ、と申給ひぬ。それより皇孫は、筑紫の日向乃高千穂[10]槌觸の峯に到り、猿田彦神は、伊勢狭長田の五十鈴の川上にわかれ給ひぬ。

注

1　仏の教えを聞き、悟りを開く資質。機根。

2　釈迦仏。

3　「乗」は迷いの此岸から悟りの彼岸へ衆生を渡す乗り物の意。衆生が煩悩の世界から菩提の世界に達する三つの方法。声聞乗・縁覚乗・菩薩乗の総称。

4　八部衆の略。仏法守護の八体一組の釈迦の眷属。特に「天竜八部衆」のこと。

5　衆生を教え導き悟りへ到達させること。

6　『日本書紀』巻二神代下（寛文九年刊本に基づく『定本日本書紀』丸山林平著　講談社による）には「先驅者還白、有一神、居天八達之衢、

其鼻七咫、背長七尺餘。當言七尋。且口尻明耀、眼如八咫鏡而赫然似赤酸漿也。卽遣神從往問。時有八十萬神、皆不得目勝相問。故特勅天鈿女曰、汝是目勝於人者。宜往問之。天鈿女乃露其胸乳抑垂裳帶於臍下而、笑嘻向立。是時、衢神問曰、天鈿女汝爲之何故耶。對曰、天照大神之子所幸道路、有如此居之者誰也。敢問之。衢神對曰、聞天照大神之子今當降行。故奉迎相待。吾名是猨田彦大神。時天鈿女復問曰、汝將先我行乎。抑我先汝行乎。對曰、吾先啓行。天鈿女復問曰、汝何處到耶。皇孫何處到耶。對曰、天神之子則當到筑紫日向高千穗槌觸之峯。吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上。」とある。

7
8 ほおずき。
9 『書紀集解』（河村秀根・益根）巻二　一七丁表には「目勝（マガチ）」「纂疏謂目眩惑」とある。『日本書紀通証』巻六　四一丁表　「重遠曰目勝蔑視之也。」「五木翁曰今謂大胆者爲目勝是也」とある。
10 奈良桜井市北部。垂仁天皇、景行天皇の皇居が置かれた。
11 「さなあがた」の約。伊勢国多気郡相可村に「佐那谷」の地名がある。

（詞書第二段）

纏向珠城乃宮（まきむくたまきのみや）にゐます、活目入彦五十狹茅天皇（いくめいりひこいさちのすめらみこと）、天の下しろしめす廿五年に、倭姫命（やまとひめのみこと）、伊勢の國にいまして、よき宮所もとめさせ給ふ時、猿田彦大神にあひ給ひければ、言壽覺（ことほぎ）しての給はく。南の大峯（おほみね）によき宮所あり。佐古久志呂宇遲（さこくしろうち）の五十鈴の川上は大八洲（おほやしま）の内にめでたき所也。翁が世に出侍りしより、二百八萬餘歳のさきにも、みしらざるあやしき物、てりかゝやく事大日輪のごとし。これなんおぼろけの物にましまさじ、定れる主出まさむ、とおもひ給ふ、と語り給ひぬ。倭姫命、ことはりいちしろし。是なんそのかみ、天地の御祖（みおや）并に、神漏岐（かむろき）、神漏美命（かむろみのみこと）、豐葦原瑞穗（とよあしはらみずほ）の國内に、伊勢加佐波（かさは）夜（や）の國はよき宮所也、と見そなはし給て、天上よりして投降し給ひし天の逆太刀・天の逆鉾・大小の金鈴五十口。日の小宮（わかみや）圖形文形これなり。天の平手をうち、悅給ひて、此處に日小宮を遷（うつ）し造り給ふとかや。

注

1 垂仁天皇の皇居。址は奈良県磯城郡纏向村大字穴師の付近。
2 垂仁天皇。
3 『祝詞大殿祭』九条家本の訓を参。
4 三重県伊勢市宇治の神路山（かみじやま）。
5 『倭姫命世記』（伊勢御巫清白氏所藏『賀茂本影寫』に基づく『新訂増補　國史大系第七巻　古事記　先代舊事本紀　神道五部書』黒板勝美著　吉川弘文館による）には「日月」とある。
6 『日本書紀』白雉元年六月北野本と寛文版本の訓を参。
7 『日本書紀』巻一神代上には「日少宮（ひのわかみや）」とある。いざなぎのみことが永住に当てられた天上の宮殿。『神道大系　古今神學類編』巻十一宗廟篇には「日小宮（ノワカミヤ）」とある。
8 『御鎭座傳記』（神宮文庫所蔵「藏皇家中興時代書寫本」及び屋代弘賢本に基づく『新訂増補　國史大系第七巻　古事記　先代舊事本紀　神道五部書』黒板勝美編　吉川弘文館による）に「猨田彦大神參。乃言壽覺　白久。南大峯有美宮處。佐古久志呂宇遲之五十鈴之河上者。大八洲之内彌畠之靈地也。随翁之出現。二百八万余歳之前尓毛。未現知留在靈物利。照耀如大日輪也。惟小縁之物尓不在須。定主出現御座耶念木。倭姫命曰。理實灼然惟久代天地之大祖（父母）天照大神。天御中主神。并神魯美伎神魯美命。誓宣弖。豐葦原瑞穗國之内尓。伊勢加佐波夜之國波。有二美宮處一利度。見定給比天。自天上志天。投降居給布。天之逆大刀。天之逆桙。大小之金鈴五十口。日之小宮之圖形文形苧是也度弖。天之平手乎拍給比弖。甚喜於懷給。於此處尓遷造日小宮給。」とある。

（詞書第三段）

猿田彦神、或時斎の内親王、神主部（はふりべ）、物忌などにさとし給はく、凡、

天地開闢の事は、聖人の述る所也。其初遠くして、其理いひがたし。願はくは、尓もろ〳〵聞給へ。吾は是、天下の土君なれば、國底立神と名づく。吾は是、時に應し機にしたがひて化生出現しつれば、氣神と名づく。吾は復、根國底國より荒備疎備來らん物に相したがひ、守護となるゆへに、鬼神と名づく。吾は復、人の爲に壽福を授與ふるゆへに、大田神と名づく。吾は、よく人の魂魄をかへすゆへに興玉神と名づく。こと〴〵くおのづからの名也。物皆いちしるしあり。我ことをへぬ、かくれさらむ、との給ふ。つたへきく、如来十萬の御名、帝釋一千の名號も、各、其德にしたがひ名づくなり。

猿田彦の御名も、

よも此ほどには限らじ。
なれど、おほくの中に少
ばかりを述て、しばらく
狭長田の五十鈴の川上を
神去し給はむとの御慮
なるべし。

注

1 『万葉集』巻十三に「五十串立　神酒座奉　神主部之　雲聚玉蔭　見者乏文」とある。

2 『神道大系　古今神學類編』（亀井山万德寺所蔵『古今神学類編』一百二巻本に基づく）巻十一宗廟篇には「宇治土公ノ遠祖猿田彦太神也。中村ニウエ森ト云所アリ。是ヲ俗ニ此社地ナリト云リ。年中行事ニ、宇治氏上社ヲ祭ト云フ事侍ルヲ思ヒ合スレバ、此森事ニヤ。御鎮座傳記云、興玉神言壽竟。干時倭姫命皇太神座正宮之西北角大地輪之中臺祝祭也。年中行事四月初申日氏神祭條云、宇治氏・石部氏同初申日祭也。宇治氏字上社祭、石部氏岩井田山口祭也、云云」とある。

3 『神道大系　古今神學類編』巻十一宗廟篇には「御名モカハリテ太田命と申ス。是猿田彦ノ神ノ苗裔ト宣フ故也。其年所久遠ナルヲ以苗裔トハ宣ヘルニヤ。御鎮座以後亦易名シテ興玉神ト申ス。是自ラ三變ノ御名也。サレドモ此神自名乘玉ヘル御別稱、此限リニ非ズ。」とある。

4 『延命地蔵菩薩経直談鈔』（渡浩一編　勉誠社）巻四に「帝釋一千諸名號」とある。

5 以下は『神道大系』所収本の組方に従った。なお『縁起』原本での確認はしていない。

（詞書第四段）

それよりして、國々地々をみて、近江國に至りましぬ。その國に大きなる湖あり。嵩嶺神山、四邊に圍饒し、被のはのうくがごとく、まことにまふとも喰喁す。ほとんど凡境にあらざれば、大神、此所にめで小艇を造り、釣をたれあそびたまふだに、吾此湖の三度桑原となれるをみし、となむかたり給ひぬ。

注

1 「真木」の義。「ま」は美称。立派な木の意で、杉または檜をいう。『日本書紀』神武天皇記に「又祈之曰、吾今當以嚴瓮、沈于丹生之川。如魚無大小、悉醉而流、譬猶被葉之浮流者、被、此云磨紀。吾必能定此國。如其不爾、終無所成、乃沈瓮於川。其口向下。頃之魚皆浮出、隨水喰喁。」とある。

2 「まな（魚）」である。

3 魚が水面に口を出して呼吸すること。

4 『太平記』（鎌田共済会郷土博物館蔵　慶長八年刊古活字本に基づく『太平記三　日本古典文学大系36』〈後藤丹治・岡見正雄校注　岩波書店〉

による）巻三十八「彗星客星事付湖水乾事」に「此湖七度マデ桑原ニ變ゼシヲ我見タリト」とある。

（詞書第五段）

土俗、其神靈を祠りて、神社をたつ。[1]老翁の姿を現し給へば、白鬚の神と申しぬ。亦比良の神と申は、かの山のふもとに跡を垂たまへばなり。

淨御原天皇、殊に尊崇したまひ、叢祠を増造り給へり。

注

1　『曾我物語』（東京大学附属図書館青洲文庫蔵十行古活字本に基づく『曾我物語　日本古典文学大系88』市古貞次・大島建彦校注　岩波書店による）巻六「比叡山はじまりの事」・『太平記』巻三十八「比叡山開闢の事」・謡曲（架蔵寛永七年黒沢源太郎浣刊観世黒雪正本に基づく『謡曲百番』西野春雄校注　岩波書店による）「白髭」に同じ話がある。

2　『日本書紀』巻二十三舒明天皇（寛文九年刊本に基づく『定本日本書紀』丸山林平著　講談社）には「淨御原宮御宇天皇」とある。奈良県明日香村飛鳥が伝承地、天武天皇と持統天皇が営んだ宮。

（ひたか　ちあき）

『地域文化研究』第二八号（二〇一三・三）

第二八回大会　萩藩郡方地理図師有馬喜惣太
―その作品と生涯―　山田　稔

火野葦平の１９４５年
～米軍資料と『革命前後』の比較～　梶原　康久